

## Alumni and Alumnae News No.7

令和8年3月に、第Ⅶ期 教職実践高度化専攻（教職大学院）院生が2年間の学びを終え、教職修士（専門職）の学位記を手し、それぞれの道に巣立っていきました。教職大学院では、学校教育に関わる専門性と実践力を持ち、学校教育における組織的取組や授業力向上、特別支援教育の取組をリードし、多様な教育課題に応えていくことのできる資質・能力を備えた人材を育成しています。第Ⅶ期修了院生も、高知県の課題解決に向け、それぞれの院生が自ら設定した研究課題に沿った研究活動に邁進し、大きな成果を残すことができました。

学校マネジメントコースの秋澤和希さんは「学校教育における生徒指導上の諸課題への教師の手立て - レジリエンス向上に焦点をあてて -」、上田稚子さんは「教務主任の学校組織への効果的な関わり方について」、氏原千恵さんは「業務の効率化・削減により教育の質を高める学校経営 - 実習校の実情に即した業務の効率化・削減の手法を探る -」、岡野秀哉さんは「不登校未然防止のための良好な人間関係の構築の取組」、田村佐緒里さんは「中山間地域の小規模校における学力定着に向かう組織の在り方 - 研究推進委員会の役割を中心に -」について研究し、学校の教育活動を効果的にマネジメントし、生徒指導上の課題の解決をはじめとして、校内の組織改革や活性化についての学びを深めました。

授業実践コースの澤田浩介さんは「問題設定による深い学びをめざした数学授業の研究」、中村大助さんは「道徳的判断力を育む手立てと道徳的環境との関連に関する研究」、西村朋花さんは「生徒が主体性を発揮する中学校理科の授業デザイン - 興味・関心を高め、見通しを持たせる授業展開の工夫 -」、藤井圭介さんは「ICTを活用した数学科授業デザインの研究」、松本恭也さんは「科学的に探究する力を育てる高等学校理科の授業構想」について研鑽を深め、ICTの活用や各教科における授業実践の高度化を図り、それぞれの授業力を高めることで質の高い学びを獲得しました。

特別支援教育コースの一谷七菜さんは「高等学校における認知特性に応じた授業方略の研究」、濱田久司さんは「特別支援教育の視点に立った全員参加の学級経営」、濱田宏美さんは「高等学校の特別支援教育推進のためのCo-MaMeを用いた生徒理解のツール開発」、溝渕優希さんは「学習面の実態把握と手立ての構築を支援するツール開発」について研究し、特別支援教育をととして個別支援だけでなく、社会の中で生きていくための力を付けるための効果的な方法を探り続けてきました。

各自の研究成果は、学会発表や学術論文として公表されています。また、修了院生は4月から学校や教育委員会で勤務し、これまで学んだ理論や培った実践力を生かしてそれぞれの職場で活躍しています。

このあと、修了院生が、本教職大学院で「理論と実践の融合」を図りながら自己成長を遂げ、高知県の教育現場を支える中核的存在・即戦力として日々実践を重ねている様子を紹介します。併せて、自らの学びを教育現場に還元し、周囲の教職員にもその成果を広げようと奮闘する姿をお伝えします。

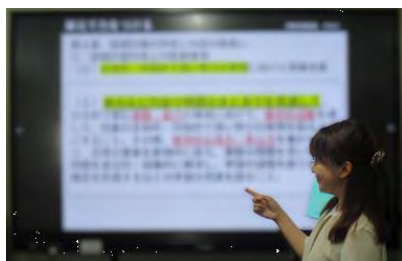
### 【学校マネジメントコース】

#### 秋澤和希さん「レジリエンスを使って日々奮闘中」いの町立枝川小学校



4月からのいの町立枝川小学校に採用され、現在は小学2年生の学級担任を務めています。教職大学院での学びは、特に子どもとの関わりに活かされており、適切なアセスメントや、それに基づく支援の実施につながっています。また、研究を通して培った批判的思考力は、授業づくりや生徒指導、学校行事など、様々な校務に活かしていると感じています。低学年を対象としたレジリエンス向上支援策の十分な実践には至っていませんが、レジリエンスを育む視点を持ち、日々の支援に当たっています。私自身もレジリエンスを発揮し、子どもたちとともに成長していきたいと考えています。

#### 上田稚子さん「学校に寄り添い、組織力を高める伴走者へ」 高知県教育委員会事務局西部教育事務所



教職大学院では、教務主任を中心とした学校の組織化を担うミドルリーダーの役割について研究し、4月より西部教育事務所で指導主事を務めさせていただいております。主に、道徳・算数等の教科指導や保幼小連携、複式教育、若年教員育成などに関する業務を担当しています。業務の中では、管理職の先生方やミドルリーダーの先生方と関わらせていただく機会が多く、教職大学院で学んだ知見を実践の場に還元することを意識しながら日々の業務に励んでおります。今後も先生方との対話を大切にし、学校に寄り添いながら学校の組織力向上につながる伴走支援に努めてまいります。

## 氏原千恵さん 「研究成果の持続的実践」 高知県立高知東高等学校



現在は在籍校にて、情報教育・図書部に所属しております。教職大学院での研究では、学校経営方針にもとづく2つの業務改善に取り組みました。その一連の継続的な取組について、昨年度校内で実施したアンケート調査を、今年度も同様に実施したところ、業務の効率化に対する肯定的な回答の割合が、昨年度を上回る結果となりました。この結果を踏まえ、今後も教職大学院で学んだ理論と学校現場での実践を往還させ、教員および生徒の教育活動の質向上につながるよう努めていきます。

## 岡野秀哉さん 「Look(見る・視る・診る)、Listen(聴く)、Link(つなぐ)、子どもの“今”を見抜き、支援につなげる」

須崎市立多ノ郷小学校



不登校未然防止のための主観的健康観の向上や、よりよい人間関係づくりに向け、毎朝の「きもちメーター」、研究でも用いた2週間ごとの「体と心のお天気チェック」、日々の観察などを通して児童のアセスメントを行っています。それらを踏まえ、短い時間ではありますが、「先生とおはなしタイム」として全員の個別面接も実施しています。繰り返し行うことで、不安なことや困っていることも表出してくれることが増えてきたように感じています。市内の不登校・不登校傾向対策委員会においても講話の機会をいただき、研究してきたことや発達段階ごとの教師のかかわりのカギについて、委員の先生方と一緒に考えることもできました。

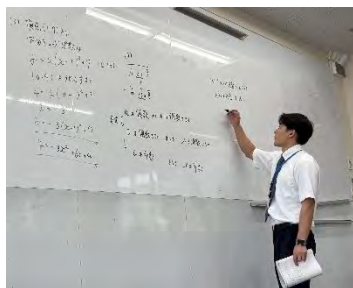
## 田村佐緒里さん 「理論の先にある、生徒の笑顔へ―「全員参加」で挑む学校づくり」 いの町立本川中学校



4月に在籍校に復帰して以来、2年生の担任と研究主任を兼任し、日々悪戦苦闘しながらも充実した時間を過ごしております。大学院では、実習校において、教職員が一致団結して「学力向上」という目標に向かうための組織づくりやマネジメントを研究してきました。今、研究主任としてその継続的实践に取り組んでいますが、理論と実際の学校現場とのギャップを実感し、組織を動かす難しさを痛感する日々です。実践の中で研究の真の目的は、常に「目の前の生徒たちの学びや成長」にあると改めて感じています。大学院での学びを土台としながら、本校の先生方とともに、本校の実態に合った「生きている研究」を創り上げていきたいと思っています。

## 【授業実践コース】

## 澤田浩介さん 「生徒とともに数学を創造する授業をめざして」 高知県立高知東高等学校



今年度から新任の教師として教壇に立ち、多忙な毎日ですが、日々成長していく生徒の姿に喜びを感じています。在学中は、高校数学の授業における深い学びの実現を目的とし、問題設定の理論、とくにWhat-If-Notストラテジーを取り入れた教材や授業デザインの開発・実践に取り組んでいました。大学院での学びを生かし、生徒がただ与えられた問題を解くのではなく、自ら疑問を持ち、考えを深められるような授業づくりを心がけています。これからも、生徒が数学の面白さを実感できる授業づくりに励んでまいります。

## 中村大助さん 「生徒が主体となる道徳的な環境づくりを目指して」 芸西村立芸西中学校



4月より在籍校に戻り、研究主任等の役割を担いながら担当教科や道徳等の授業づくりを行っています。特に、2年間の学びを生かして生徒の実態に合った道徳の授業について模索したり、道徳と総合的な学習の時間や学級活動等を関連付けた単元的な学習を計画することによって、生徒が主体となる道徳的な環境づくりを目指しています。今後も校内研修などを通して自身の学びを先生方と共有し、学校全体で一人一人の子どもたちの豊かな心を育んでいけるような環境づくりに貢献したいと考えています。

## 西村朋花さん 「生徒が主体的に理科を学ぶことを目指して」 いの町立伊野中学校



4月から新任校で理科の教科指導及び特別支援学級担任として日々過ごしています。大学院で学んだことを生かし、様々な場面で生徒が主体性を発揮するために実生活から疑問を持たせたり、レディネステストを行ってどのようなことに疑問や素朴概念があるのかを把握するなどして興味・関心を持たせるための手立てをしています。教科の中で困ったことがあるときには、大学院で学んだ理科の指導法や拝見させていただいた授業実践を振り返りながら活用できることはないか考えています。これからも生徒の疑問から問題を見出して、生徒が主体性を発揮することができるような授業づくりを行っていきたいと思います。

## 藤井圭介さん 「数学における探究授業の確立をめざす」 いの町立伊野南中学校



4月より在籍校に戻り、1年学年主任・教務主任を務めています。授業は3学年すべてを担当しているので、大学院で研究・実践した授業をブラッシュアップしながら、さらにどの単元でどのような課題で探究授業が行えるか挑戦している最中です。また、大学院在学中に作成したGeoGebraを使った教材を他の先生方に広めるための方策を模索しています。現場の業務に追われることが多い日々ですが、大学院での学び(授業実践の学びだけでなく、日々の授業や他の院生の研究での学びも含めて)を生かしながら奮闘しています。

## 松本恭也さん 「大学院での学びを生かした授業づくり」 高知県立山田高等学校



4月から新任校で、高等学校の教員として生物を中心とした授業や男子バレーボール部の指導に取り組んでいます。大学院では、生徒同士の対話を通して学びを深める授業づくりについて研究しました。現在も、生徒が自分の考えを持ち、他者との対話を通して考えを深められるような授業を意識しています。実際の現場では難しさを感じる場面は多々ありますが、大学院で学んだ多くのことを生かしながら、生徒の実態を丁寧に捉え、日々授業改善に取り組んでいきたいと思っています。

## 【特別支援教育コース】

## 一谷七菜さん 「自己調整学習の実践」 高知県立高岡高等学校



今年度から在籍校に戻り、特別支援教育学校コーディネーターとして、特別支援教育に携わっています。特別支援教育の視点での授業改善を目指して、校内研修を企画・実施するほか、校内支援委員会を通じて個別の支援について話し合い、生徒が安心して過ごせる環境づくりに努めています。また、私自身の研究テーマである「自己調整学習」の推進にも取り組んでいます。実践の中ではうまくいかないこともたくさんありますが、そんな時こそ研究の視点を持って、「なぜうまくいかないのか、どうすればいいのか」と分析し、授業改善につながるよう試行錯誤を重ねています。今後も多様な生徒のニーズに応じた支援ができるような授業づくり、環境整備に努めます。

## 濱田久司さん 「特別支援教育の視点を生かした、全員が居心地の良い学級をめざして」 香南市立野市小学校



在籍校に戻り6年生の担任をしています。昨年度から、本校の研究の柱に授業UD、授業DX、学級経営とし、ベースに特別支援教育の視点を取り入れていただき、校内の研究を進めています。私自身の学級経営としては、特別支援教育をベースとした子どもへの見方を通して、子どもの味方になり、縦、横のつながりをつくれるようにしています。それが、全員が安心できる、居心地の良い学級ができると思い取り組んでいます。一人一人の子どもを知ろうとすればするほど、難しさを感じますが、特別支援教育の視点がなければ、深い子ども理解にはならないとも実感しています。

## 濱田宏美さん 「脳科学や心理学等の科学的根拠に基づいた授業デザインの実践」 高知県立高知小津高等学校



大学院で関心を持った脳科学や心理学等の科学的根拠に基づいた授業デザインとして、私は今年度「デュアルコーディング（二重符号化）」に取り組んでいます。「言葉（言語的な情報）」と「絵や図（視覚的な情報）」とを組み合わせ、同じ情報を二つの形式で記憶し、後で情報を検索する方法や手がかりを増やし、効率を上げて学習効果を高めるといえるものです。具体的には、授業時にスライドや図を効果的に使用するというシンプルな方法ですが、根拠に基づいて自己の授業スタイルを改善し、学びのユニバーサルデザイン化を図っています。

## 溝渕優希さん 「生徒一人一人の的確な実態把握と実態に即した手立ての構築にチームで取り組んでいます」

## 高知県立高知江の口特別支援学校



高知県立高知江の口特別支援学校で勤務しています。現在は大学院で学んだ知識を活かして、生徒の実態把握や手立ての構築に努めていますが、生徒達の抱える課題は多様であり、まだまだたくさん学ぶことがあります。また、現場に戻ってからはチームで協働することの大切さを改めて実感しています。生徒の実態を異なる視点からとらえ、チームで手立てを話し合うことが、よりの確な対応へつながると感じています。大学院での学びや研究成果は、現任校に反映するだけでなく、高等学校での研修等を通して発信する機会をいただいています。これからも特別支援教育の知識を学校種を超えて広げていきたいと思っています。

## 【在院生へのメッセージ】

**学校マネジメントコースより**・・・教職大学院で学んだ2年間は、これまでの教員生活を振り返り、教育実践を理論に基づいて捉え直すとともに、教育観や指導観を一層深めることができた有意義な時間でした。異年齢・異校種の院生との学びはかけがえのない経験であり、課題や研究に取り組む中で互いの知識や意見を持ち寄り協働することで視野が広がり、物事をより多面的に捉えられるようになりました。研究が行き詰まった際には、先生方が専門的知見に基づき丁寧にご助言くださり、学びを深める大きな支えとなりました。修了後、それぞれの現場や立場で多角的な視点から教育課題に向き合い、周囲と連携して解決を図ろうと努めていますが、これも大学院での探究と協働の積み重ねがあってこそだと感じています。在院生のみなさんには、先生方や仲間とのつながりを大切に、学びを通して自身を高めながら研究を深めていただきたいと思います。実り多き大学院生活となりますよう心より願っています。

**授業実践コースより**・・・現場から2年間離れての大学院での生活は、教鞭をとってくださった大学院の先生方、先輩・後輩の院生の方々、そして同期の仲間から多くの刺激と新たな視点、様々な考え方を学ぶ本当に良い機会であったと思います。大学院で学んだことを現場で実践して評価・改善するサイクルを回しながら、さらに新しい問いが生まれて追究していく。これはまさに探究学習であり、今後の教育において主となるものでもあります。授業実践はこのような答えのない問いを試行錯誤しながら追究していく探究学習ではないでしょうか。在院生の皆様、これからも今の時間を大切にして、在院生同士切磋琢磨しながら、研究を楽しんでください。皆様とともに仕事ができる日をお待ちしております。

**特別支援教育コースより**・・・教職大学院では、特別支援教育についての理論を深める絶好の機会です。学校現場に戻り、授業、生徒指導、学級経営、学校経営は成り立たないと改めて感じています。個別最適な学びの必要性や、不登校の児童生徒数が高まっている現代の教育界において、経験値だけではなく、理論をもとに特別支援教育の視点から物事を捉える力は必須のものだと思います。教職大学院での学びを通して児童・生徒の背景要因に目を向ける姿勢が身につく、一人一人の子どもに対する捉え方や考え方が柔軟になり、彼らの本当の声に耳を傾けることができるようになりました。そのことにより、自分自身も教師として成長できていると感じる日々を送っています。志を同じくする仲間と様々な論議を交わし、自己の教育観をアップデートできる、本当に貴重な教職大学院での時間を大切に過ごしてください。

## Editorial note:

第Ⅶ期修了生は、修了後もそれぞれの職場で教育課題の解決に向けた実践と自己研鑽を重ねています。また、新たな課題に直面する中で、自らの実践を振り返り試行錯誤を重ねながら、教育者としてさらに成長しようとしています。

修了生の皆さんには、本教職大学院で培った理論と実践力をそれぞれの教育現場で生かし、教育実践を積み重ねてほしいと願っています。そして、その実践が本県の実践課題の解決につながるとともに、県内外の実践にも新たな示唆を与えるものへと発展していくことを期待しています。

今後も、それぞれの立場で学び続け、周囲の教職員と協働しながら、本県の教育を支える中核的な存在として、さらなる成長を遂げていくことを願っています。

発行者：高知大学大学院教職実践高度化専攻長 野村幸代

編集者：教職実践高度化専攻総務係・ニューズレター委員

発行日：2026年10月9日

事務局：教職実践高度化専攻附属学校教育研究センター

〒780-8520 高知県高知市曙町2-5-1 ( 教職大学院係 )

TEL088-844-8457

E-mail [ks33@kochi-u.ac.jp](mailto:ks33@kochi-u.ac.jp)